

〈研究ノート〉

葛飾区個人宅所蔵の近代貨幣の調査

三宅俊彦

要約

本稿は、東京都葛飾区の個人住宅にて、旧宅取り壊しの際に神棚より発見された近代貨幣について行った調査および初歩的な分析の報告である。近代貨幣は神棚に安置された大黒天と恵比須(木彫)を祀る小型の社の中から617枚、銅製の恵比須人形型貯金箱から48枚発見された。近代貨幣の年代は20世紀前半である。

本資料は神棚に納めた「賽銭」という点に特徴があり、当時通用していた貨幣の中から少額貨幣を選んでいる。また恵比須人形型貯金箱には、小型50銭黄銅貨を重点的に投入しているなど、個人の意図を感じさせるもの状況も看取できた。一方で、一種類(同一額面)の貨幣については無作為に選ばれている。その点については、数量の多い3種類の貨幣を抜き出し、その比率と発行量の関係を分析したところ、両者がよく一致することから裏付けることができた。

本資料のような近代貨幣についての考古学的手法による調査は類例が乏しく、その点から今回の調査は先駆けとなる試みと言える。

キーワード

近代貨幣 葛飾区 個人宅所蔵 賽銭 貨幣発行量

はじめに

本稿は東京都葛飾区の個人宅にて発見された、近代貨幣の調査報告である。貨幣は20世紀前半に住宅の神棚に賽銭として納めたものと考えられ、当時の貨幣流通の一端を示す資料と思われる。そのため今回初歩的な調査を実施し、その概要を報告する。

1

1. 資料の概要

1) 発見の経緯とその性格

2022年8月、筆者が所有者に聞きとりを実施した。以下は、その概要である。

みやけ としひこ：淑徳大学 人文学部 教授



図1 神棚内の小型社に安置された大黒天と恵比須の木彫



図2 恵比須人形型貯金箱

1998(平成10)年10月、葛飾区に所在した内田氏旧宅の取り壊しの際、神棚を整理したところ明治～昭和初期の貨幣が発見された。貨幣はすべて収集して新居にて保管しており、現在も内田氏宅に所蔵されている。

貨幣は神棚の中に安置された小型の社の中から発見された。小型社には大黒天と恵比須の木彫(図1)と、恵比須人形型貯金箱(図2)が祀られていた。貨幣はその小型社内および、恵比須人形型貯金箱内より発見されたため、外容器は、神棚内の小型社、および恵比須人形型貯金箱(銅製)である。

これらの貨幣を貯めたのは内田氏の父および祖母と推測される。

発見されたものは高額貨幣ではないため、神棚に「賽銭」として納めたと思われる。一部貯金箱に入れられていたが、神棚に安置されていた状況から、これも「賽銭」としての性格が強いと考えられる。

2) 調査経過

発見された近代貨幣は、2021年7月から10月の休日を利用し、筆者と内田宏美¹⁾によりクリーニングを行い、種類と発行年をもとに集計を行ったのち、種類・発行年に従い拓本を採った²⁾。拓本を採った資料については、2022年8月に筆者が画像データ化する作業を行った。

3) 近代貨幣の種類

以下、発見された近代貨幣を「本資料」と呼ぶ。

本資料は近代貨幣を中心としている³⁾。資料の種類について、神棚内の小型社と恵比須人形型貯金箱に分け、それぞれ見ていく。

2

① 神棚内の小型社

近代貨幣の総数は617枚であった。最も古い貨幣は明治39年(1906年)発行の旭日50銭銀貨であり、最も新しい貨幣は昭和25年(1950年)発行の1円黄銅貨であった⁴⁾。このことから、神棚内の小型社へ継続して貨幣を投入していた時期は、20世紀前半と考えることができる。

貨幣の種類と枚数を少額貨幣の順に示すと次のようになる。詳細は表1を参照していただきたい。

桐1銭青銅貨は大正6年(1917年)から大正13年(1924年)、昭和2年(1927年)、昭和4年(1929年)から昭和13年(1938年)までのものが373枚あった。

カラス1銭黄銅貨は昭和13年(1938年)のものが7枚あった。

5銭ニッケル貨は昭和8年(1933年)、昭和9年(1934年)、昭和11年(1936年)のものがそれぞれ1枚ずつ計3枚あった。

10銭白銅貨は大正9年(1920年)から大正12年(1923年)、大正14年(1925年)から昭和4年(1929年)、昭和7年(1932年)のものが106枚あった。

10銭ニッケル貨は昭和9年(1934年)から昭和11年(1936年)のものが9枚あった。

10銭アルミ青銅貨は昭和14年(1939年)のものが1枚あった。

旭日50銭銀貨は明治39年(1906年)から大正6年(1917年)のものが45枚あった。

小型50銭銀貨は大正11年(1922年)から大正15年(1926年)、昭和3年(1928年)から昭和12年(1937年)のものが62枚あった。

大型50銭黄銅貨は昭和21年(1946年)のものが2枚あった。

1円黄銅貨は昭和24年(1949年)、昭和25年(1950年)のものが7枚あった。

穴ナシ5円黄銅貨は昭和24年(1949年)のものが2枚あった。

本資料の多くは焼香によるものと思われる煤が付着していた。聞きとりによると神棚は仏壇の上に設置されていたといい、仏壇の焼香の煙によるものと思われる。損耗などは少なく状態は比較的良好であった(図3～10)。

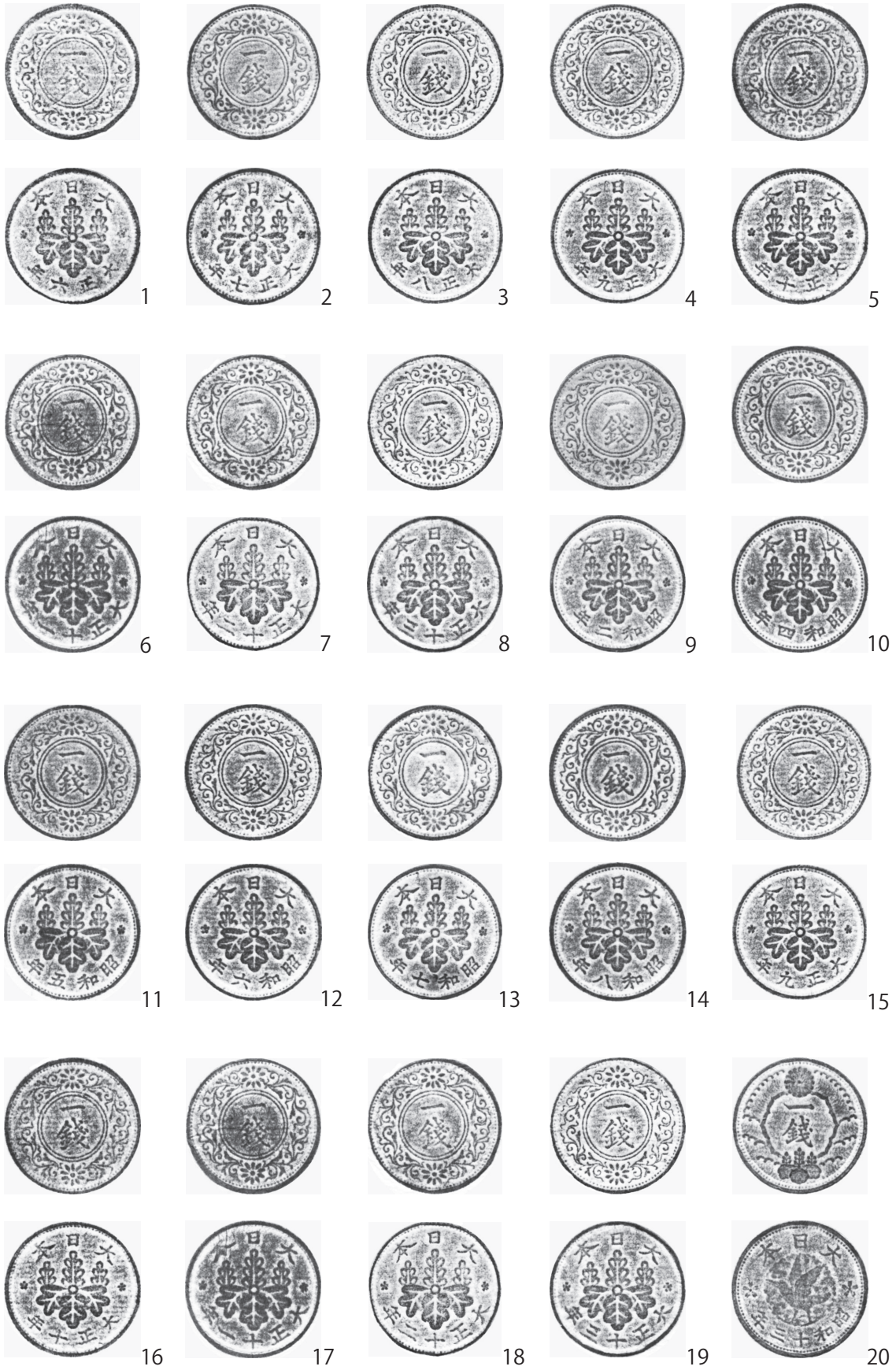
表1 神棚内の小型社近代貨幣集計表

発行年		桐1銭青銅貨		カラス1銭黄銅貨		5銭ニッケル貨		10銭白銅貨		10銭ニッケル貨	
西暦	元号	数量	図版	数量	図版	数量	図版	数量	図版	数量	図版
1906	明治39年										
1907	明治40年										
1908	明治41年										
1909	明治42年										
1910	明治43年										
1911	明治44年										
1912	明治45年										
1913	大正2年										
1914	大正3年										
1915	大正4年										
1916	大正5年										
1917	大正6年	4	図3,7-1								
1918	大正7年	13	図3,7-2								
1919	大正8年	23	図3,7-3								
1920	大正9年	34	図3,7-4					7	図4,8-24		
1921	大正10年	41	図3,7-5					8	図4,8-25		
1922	大正11年	42	図3,7-6					17	図4,8-26		
1923	大正12年	30	図3,7-7					46	図4,8-27		
1924	大正13年	30	図3,7-8								
1925	大正14年							7	図4,8-28		
1926	大正15年							7	図4,8-29		
1927	昭和2年	4	図3,7-9					6	図4,8-30		
1928	昭和3年							5	図4,8-31		
1929	昭和4年	1	図3,7-10					2	図4,8-32		
1930	昭和5年	1	図3,7-11								
1931	昭和6年	3	図3,7-12								
1932	昭和7年	9	図3,7-13					1	図4,8-33		
1933	昭和8年	7	図3,7-14			1	図4,8-21				
1934	昭和9年	21	図3,7-15			1	図4,8-22			6	図4,8-34
1935	昭和10年	70	図3,7-16							1	図4,8-35
1936	昭和11年	20	図3,7-17			1	図4,8-23			2	図4,8-36
1937	昭和12年	15	図3,7-18								
1938	昭和13年	5	図3,7-19	7	図3,7-20						
1939	昭和14年										
1946	昭和21年										
1949	昭和24年										
1950	昭和25年										
合計		373		7		3		106		9	

4

研究論集第8号(2023.3)

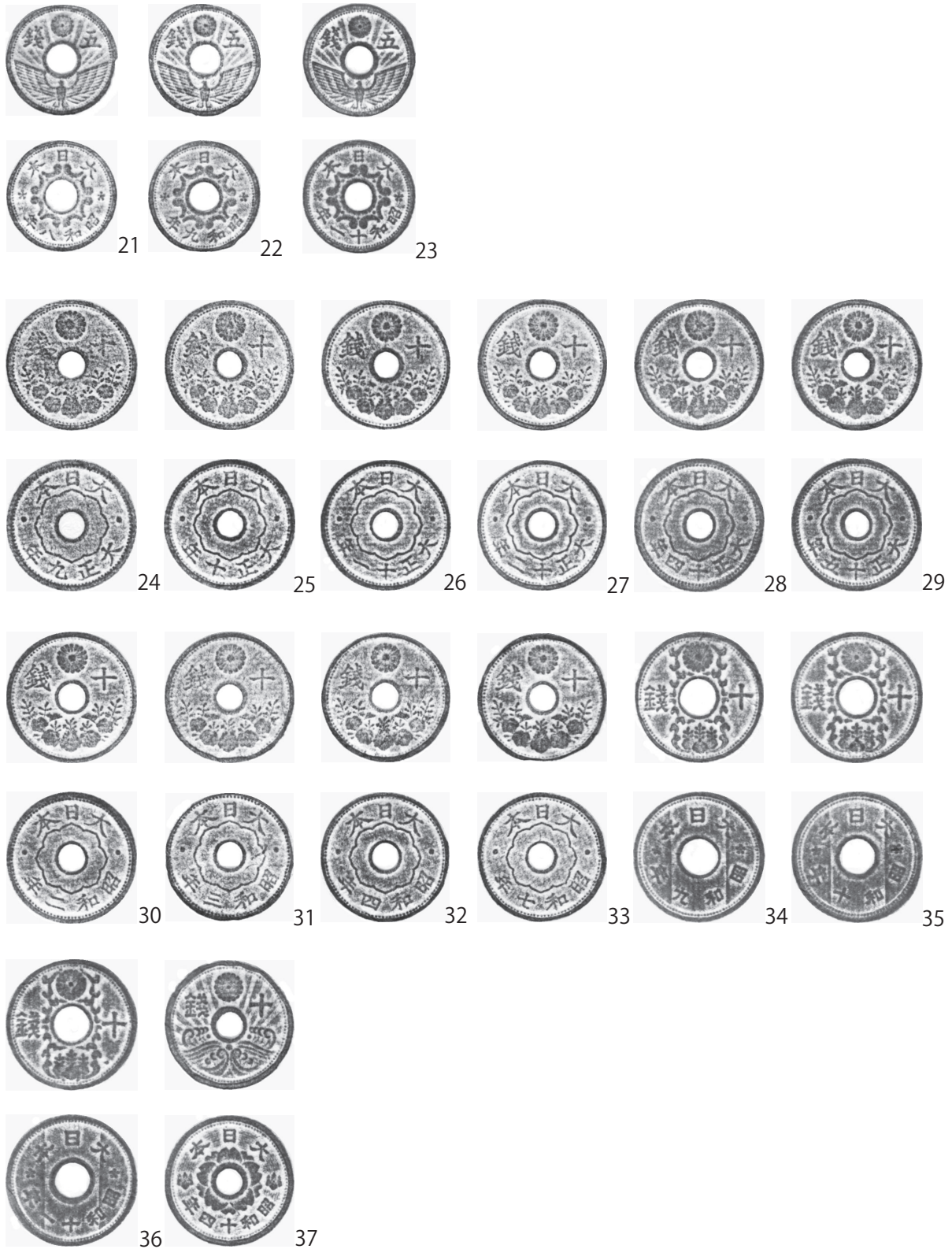
10銭アルミ青銅貨		旭日50銭銀貨		小型50銭銀貨		大型50銭黄銅貨		1円黄銅貨		穴ナシ5円黄銅貨	
数量	図版	数量	図版	数量	図版	数量	図版	数量	図版	数量	図版
		5	図5,9-38								
		6	図5,9-39								
		7	図5,9-40								
		4	図5,9-41								
		6	図5,9-42								
		3	図5,9-43								
		1	図5,9-44								
		2	図5,9-45								
		1	図5,9-46								
		1	図5,9-47								
		3	図5,9-48								
		6	図5,9-49								
						8	図6,10-50				
						13	図6,10-51				
						6	図6,10-52				
						4	図6,10-53				
						2	図6,10-54				
						2	図6,10-55				
						2	図6,10-56				
						1	図6,10-57				
						3	図6,10-58				
						3	図6,10-59				
						1	図6,10-60				
						2	図6,10-61				
						2	図6,10-62				
						6	図6,10-63				
						7	図6,10-64				
1	図4,8-37										
						2	図6,10-65				
								5	図6,10-66	2	図6,10-68
								2	図6,10-67		
1		45		62		2		7		2	



6

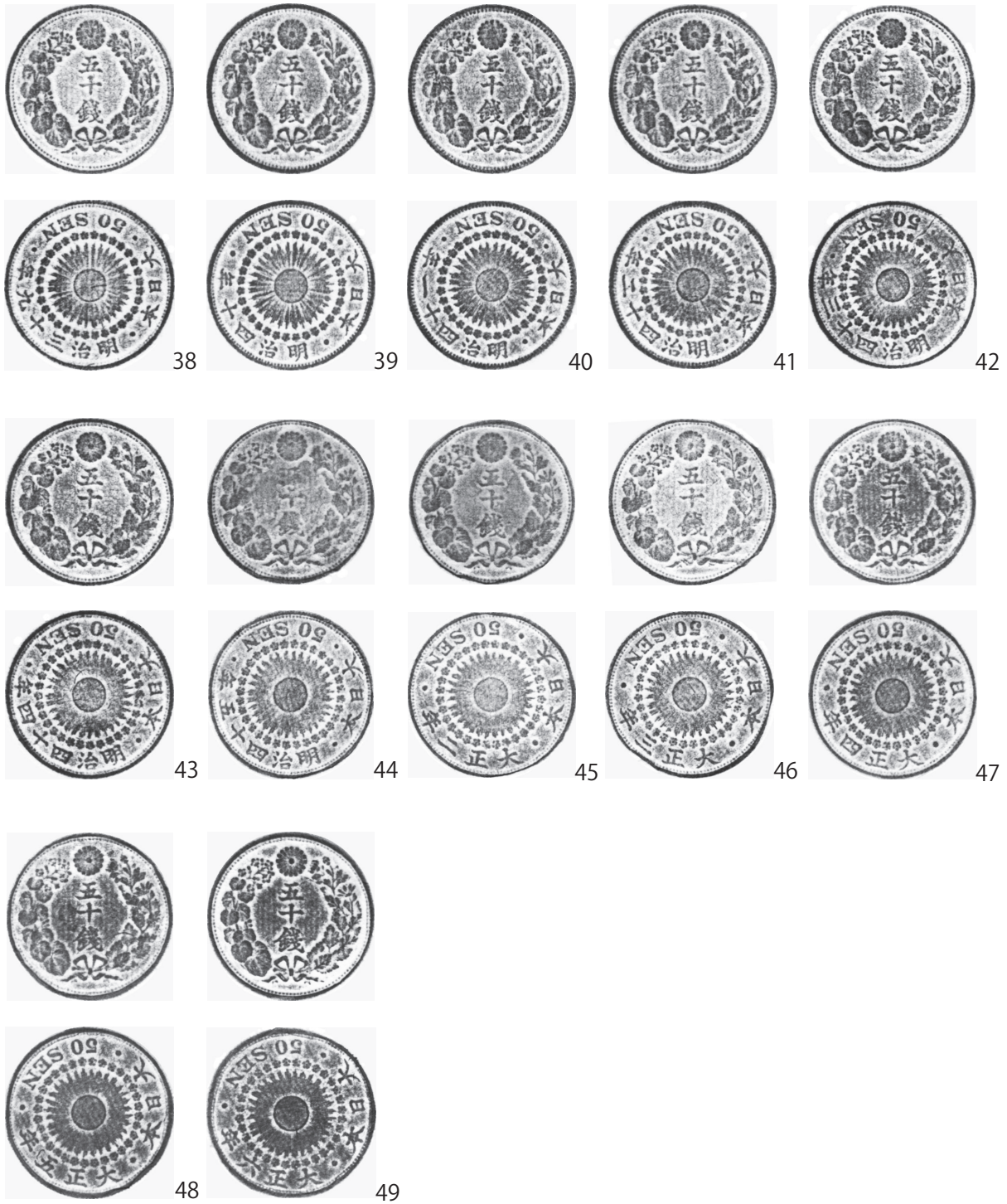
(種別は表1参照、S=1/1)

図3 神棚内の小型社の桐一銭青銅貨・カラス一銭黄銅貨(拓本)



(種別は表1参照、S=1/1)

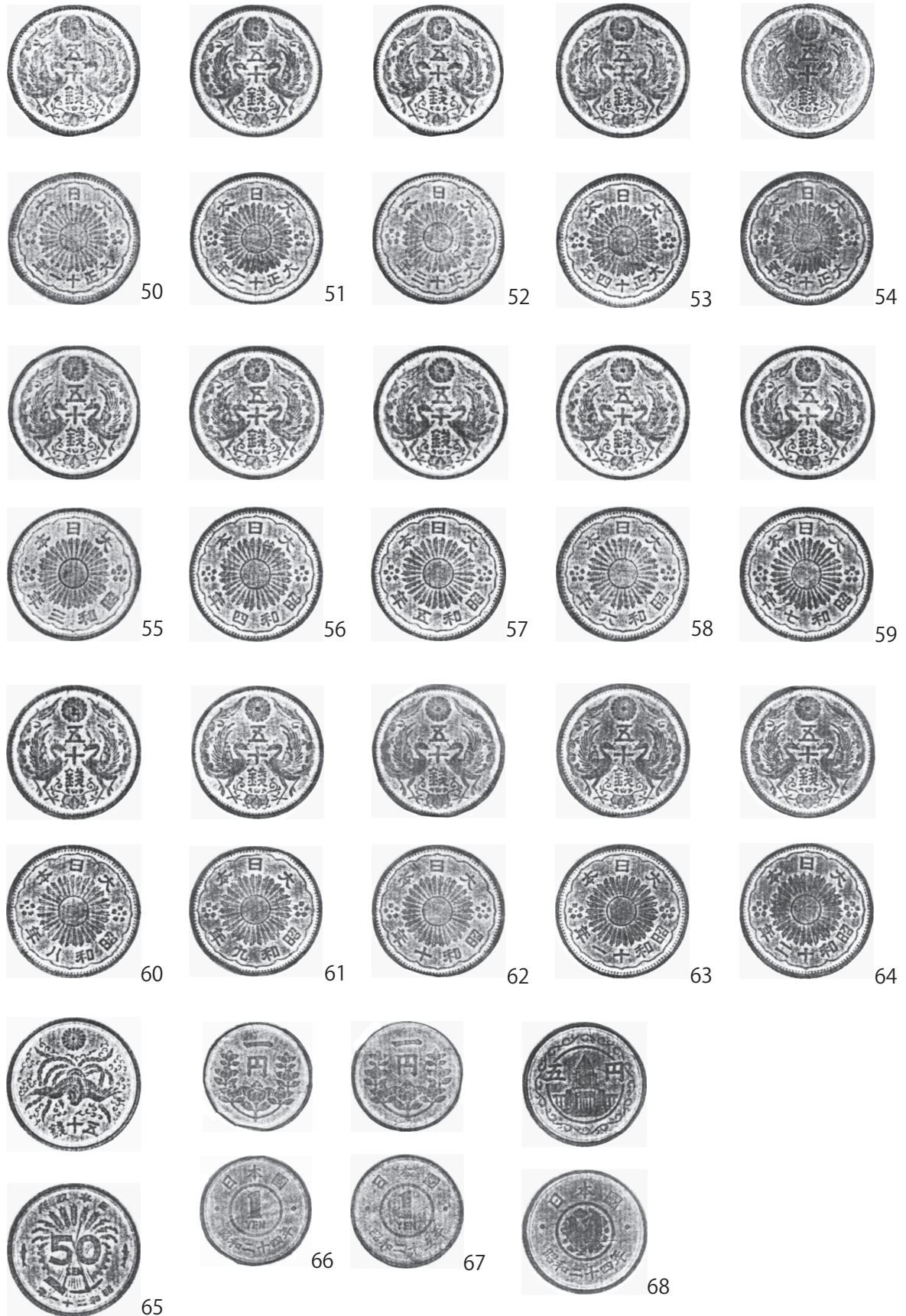
図4 神棚内の小型社の5銭ニッケル貨・10銭白銅貨・10銭ニッケル貨・10銭アルミ青銅貨(拓本)



8

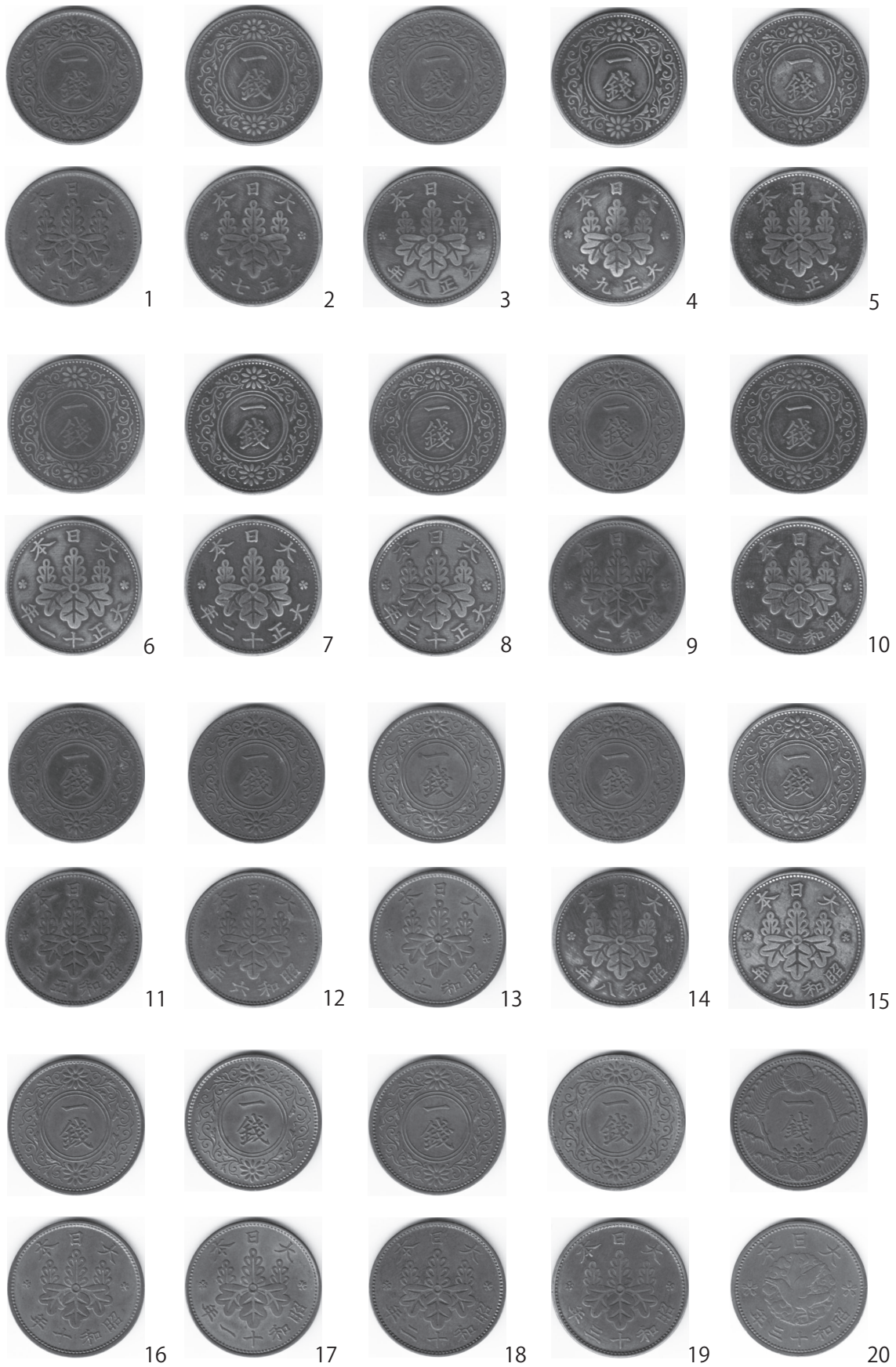
(種別は表1参照、S=1/1)

図5 神棚内の小型社の旭日50銭銀貨(拓本)



(種別は表1参照、S=1/1)

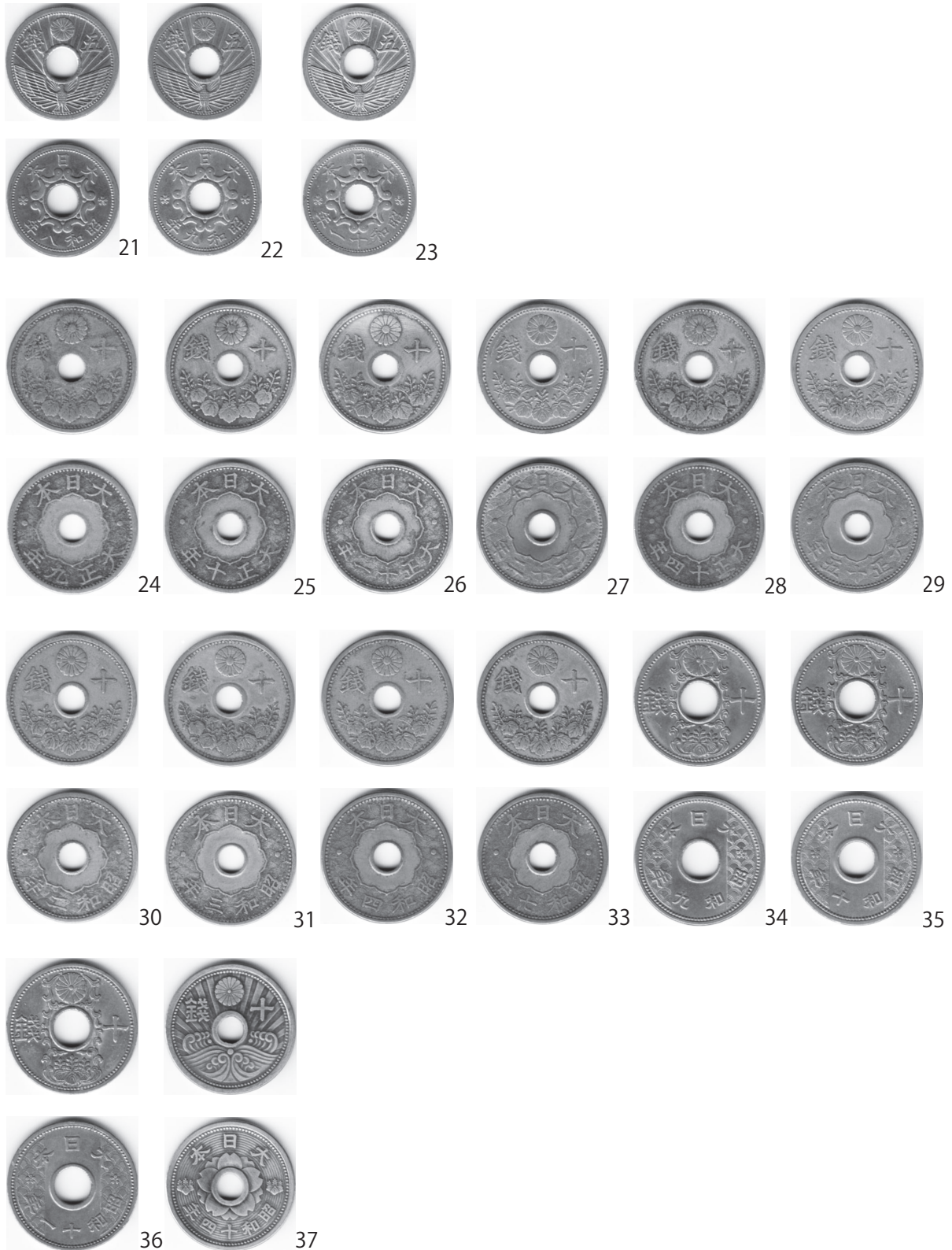
図6 神棚内の小型社の小型50銭銀貨・大型50銭黄銅貨・1円黄銅貨・穴ナシ5円黄銅貨(拓本)



10

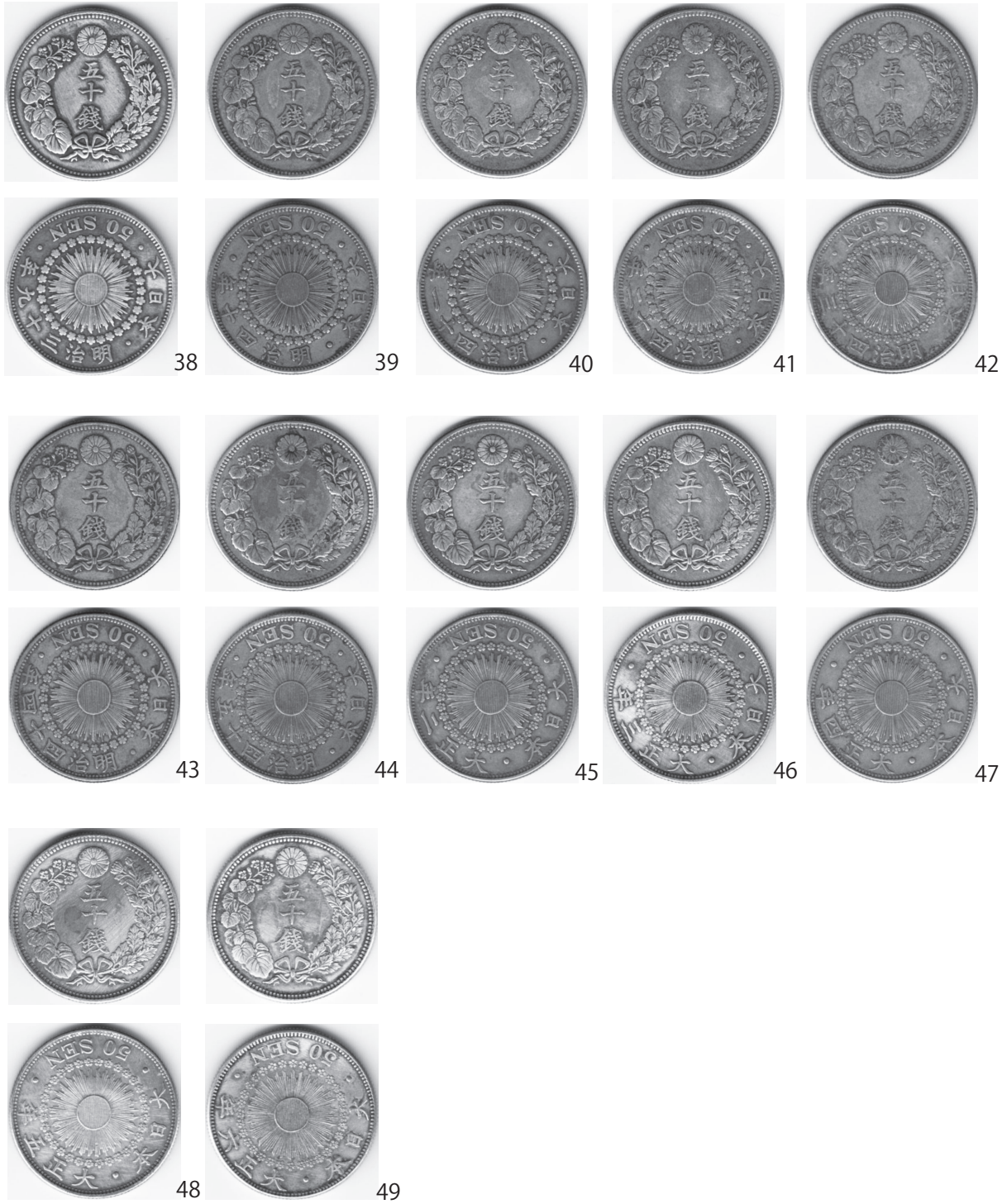
(種別は表1参照、S=1/1)

図7 神棚内の小型社の桐1銭青銅貨・カラス1銭黄銅貨(画像)



(種別は表1参照、S=1/1)

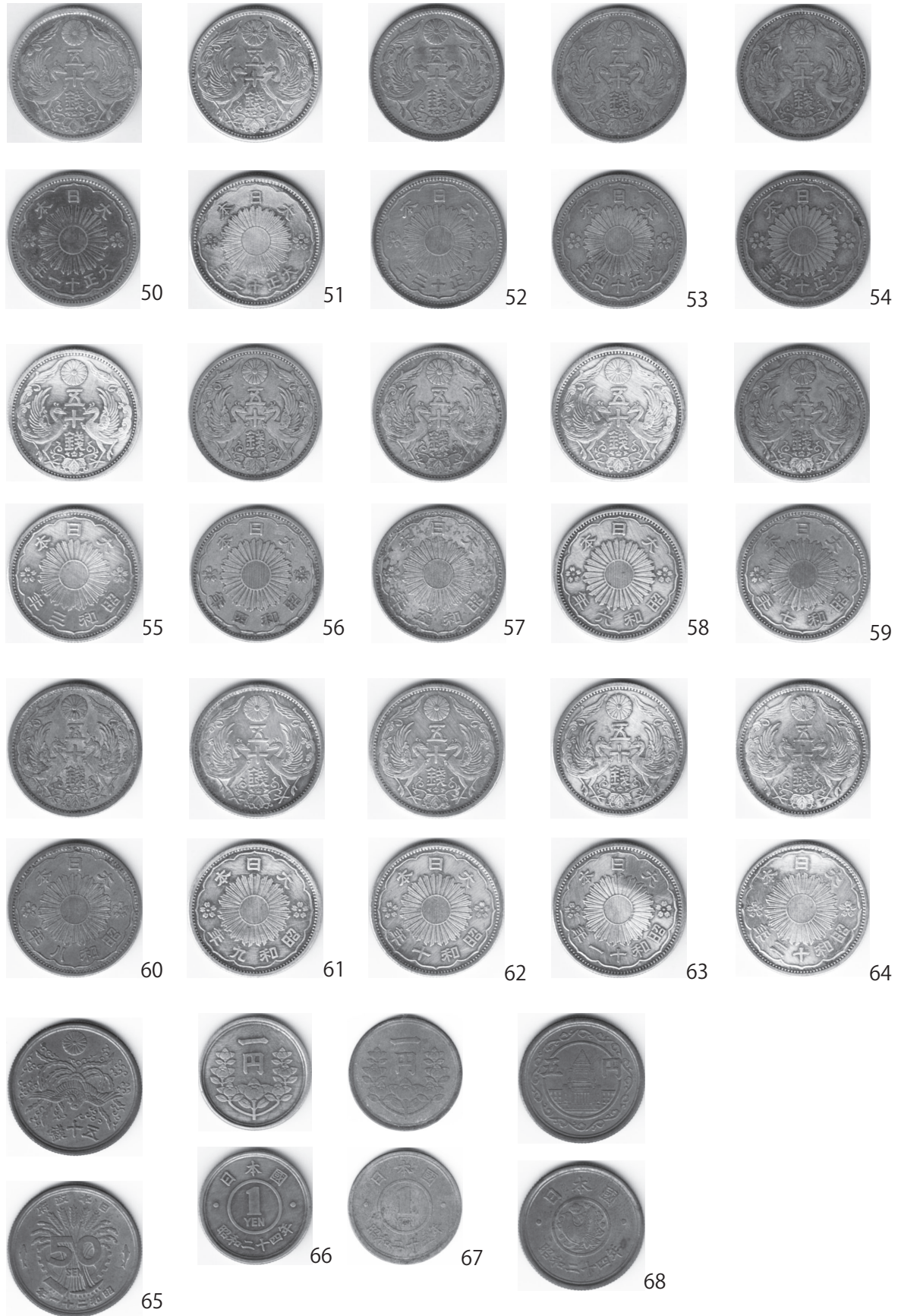
図8 神棚内の小型社の5銭ニッケル貨・10銭白銅貨・10銭ニッケル貨・10銭アルミ青銅貨(画像)



12

(種別は表1参照、S=1/1)

図9 神棚内の小型社の旭日50銭銀貨(画像)



(種別は表1参照、S=1/1)

図10 神棚内の小型社の小型50銭銀貨・大型50銭黄銅貨・1円黄銅貨・穴ナシ5円黄銅貨(画像)

② 恵比須人形型貯金箱

近代貨幣の総数は48枚であった。最も古い貨幣は昭和8年(1933年)発行の5銭ニッケル貨であり、最も新しい貨幣は昭和24年(1949年)の1円黄銅貨であった。含まれていた貨幣の種類は4種類のみである(表2)。

カラス1銭アルミ貨は昭和14年(1939年)のBタイプが1枚あった。

5銭ニッケル貨は昭和8年(1933年)のものが1枚あった。

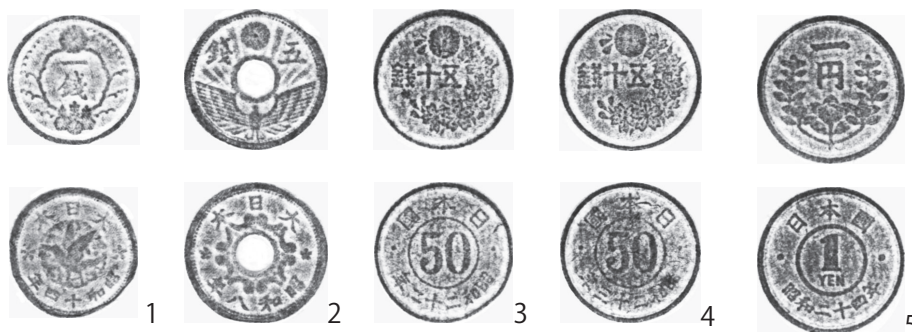
小型50銭黄銅貨は45枚あり、昭和22年(1947年)のものが33枚、昭和23年(1948年)のものが12枚あった。

1円黄銅貨は昭和24年(1949年)のものが1枚あった。

恵比須人形型貯金箱内の貨幣は48枚中45枚が小型50銭黄銅貨であり、昭和22, 23年(1947, 48年)発行のもののみが確認された。この小型50銭黄銅貨は、神棚内の小型社の貨幣資料には含まれていないことから、貨幣の投入者はこの貯金箱を「小型50銭黄銅貨専用」と考え、この時期に集中してこの貨幣を投入したものと考えられる。他の貨幣がわずかしか含まれないことも、この傾向を補強していると言えよう。その点も踏まえ、この貯金箱に貨幣を定期的に投入していた時期は、昭和22(1947年)から小額通貨が発行と通用を停止する昭和28年(1953年)までの間と推測される⁵⁾。

表2 恵比須人形型貯金箱近代貨幣集計表

発行年		カラス1銭アルミ貨 昭和14年Bタイプ		5銭ニッケル貨		小型50銭黄銅貨		1円黄銅貨	
西暦	元号	数量	図版	数量	図版	数量	図版	数量	図版
1933	昭和8年			1	図11, 12-2				
1939	昭和14年	1	図11, 12-1						
1947	昭和22年					33	図11, 12-3		
1948	昭和23年					12	図11, 12-4		
1949	昭和24年							1	図11, 12-5



(種別は表1参照、S=1/1)

図11 恵比須人形型貯金箱のカラス1銭アルミ貨昭和14年Bタイプ・5銭ニッケル貨・小型50銭黄銅貨・1円黄銅貨(拓本)



(種別は表1参照、S=1/1)

図12 恵比須人形型貯金箱のカラス1銭アルミ貨昭和14年Bタイプ・5銭ニッケル貨・小型50銭黄銅貨・1円黄銅貨(画像)

2. 調査結果と分析

1) 調査結果

① 種類が偏っている

分析の結果本資料は、当時流通していた貨幣の中でも少額貨幣を選んで納めていたことが明らかとなった。20世紀初めに発行されていた貨幣には、新20円金貨、新10円金貨、新5円金貨などの金貨や、新1円銀貨(小型)などの銀貨などのほか、それ以前に発行された金貨も国内で流通していたと考えられるが、それら高額貨幣は含まれてはいなかった⁶⁾。

これは神棚に納めるものとして、首肯できる結果と言えよう。また恵比須人形型貯金箱の貨幣は、昭和22・23(1947・48年)年に発行された小型50銭黄銅貨がほとんどを占めており、この貯金箱にはこの貨幣のみを投入しようとしたことが分かる。

なお、小型50銭黄銅貨は昭和22・23年(1947・48年)の2年間のみの発行であるが、総発行枚数は849,234,445枚と一定量流通していたと考えられる⁷⁾。これらを入手した際に、この貯金箱へ入れることを習慣としていたのであろう。

② 資料の性格

このように、本資料は流通貨幣の中から、「少額貨幣」を選び、貯金箱には「小型50銭黄銅貨」を選んで投入した意図が読み取れる。この点から本資料は、当時の貨幣流通の状況を正確に反映したものとは言えない。あくまでも神棚に貨幣を納めるという、個人の活動が反映されていると見るべきであろう。

しかしその一方で、神棚内の小型社に納められた貨幣を種類ごとに抽出した場合、発行年などでは特に選択せず納めていると思われる。この点から見れば、神棚内の小型社の貨幣は特定の種類に限って発行年と含まれる比率を分析すると発行量との相関が読み取れ、当時の貨幣流通の様相を反映していると言えよう。以下に枚数の多い3種類の貨幣を抜き出し、分析してみたい。

15

2) 若干の分析

① 桐1銭青銅貨

ここでは神棚内の小型社に納められた貨幣の中から、多く発見された3種類(額面)の貨幣について、その発行年ごとの含まれる比率と、貨幣の発行量を分析してみた。

まず桐1銭青銅貨について分析したい。桐1銭青銅貨は大正6年(1917年)から昭和13年(1938年)までのものが、373枚発見されている。これらを発行年ごとに分け、その比率を示したものが図1の折れ線である(比率は右目盛り)。また『日本貨幣カタログ2021』(日本貨幣商協組合2020年)に基づいて発行量を棒グラフで図13に示した(発行量は左目盛り)。

両者を分析すると、発行年ごとの比率が発行量とよく一致していることが読み取れる。

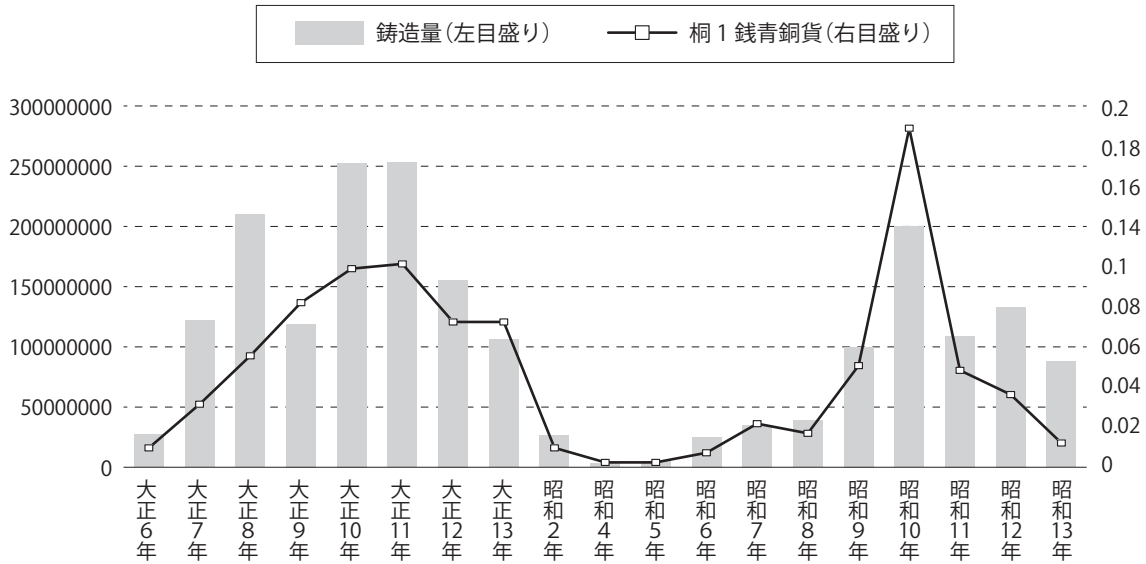


図13 桐1銭青銅貨の比率と発行量の比較

② 10銭白銅貨

次に10銭白銅貨を分析したい。10銭白銅貨は大正9年(1920年)から昭和7年(1932年)のものが、106枚発見されている。その中に含まれる発行年ごとの比率と、発行量を図14に示す(凡例は図13と同様である)。

その結果はやはり、発行年ごとの比率が発行量と一致していることが読み取れる。

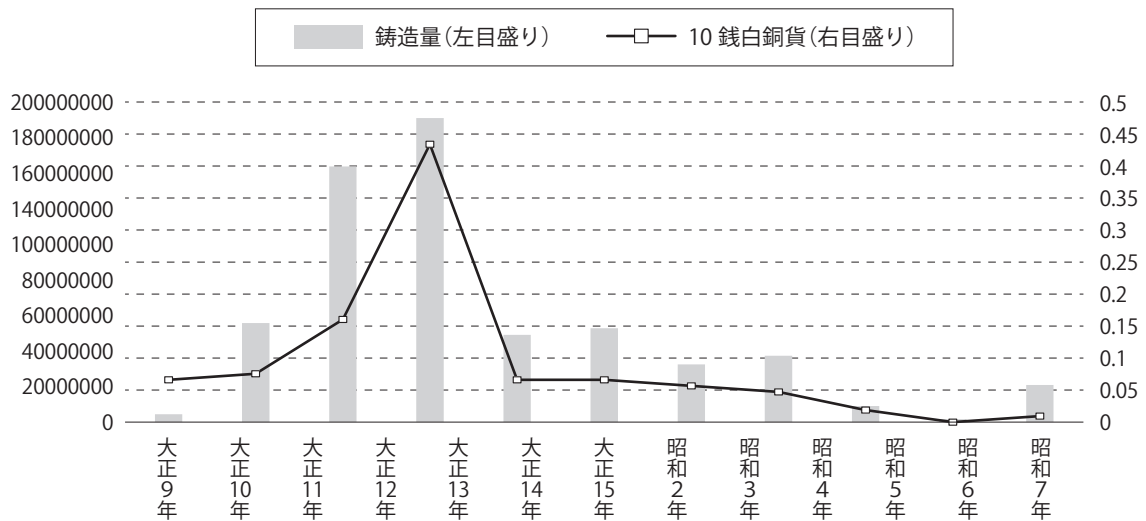


図14 10銭白銅貨の比率と発行量の比較

③ 50銭銀貨

50銭銀貨は旭日50銭銀貨と小型50銭銀貨の2種類がある。旭日50銭銀貨は明治39年(1906年)から大正6年(1917年)のものが45枚、小型50銭銀貨は大正11年(1922年)から昭和12年(1937年)までの62枚があり、合計107枚である。

これらは同一額面であることから、合算して分析を進める。上記2点と同様に、その中に含まれる発行年ごとの比率と、発行量を図15に示す(凡例は図13と同様である)。

分析結果は、発行年ごとの比率が発行量と、ほぼ一致していることが読み取れる。

これら3点の分析結果をまとめると、これらの貨幣は小額貨幣として選択されているが、その種類の中では発行年などを意識せず、無作為に選んで納めていたと言える。

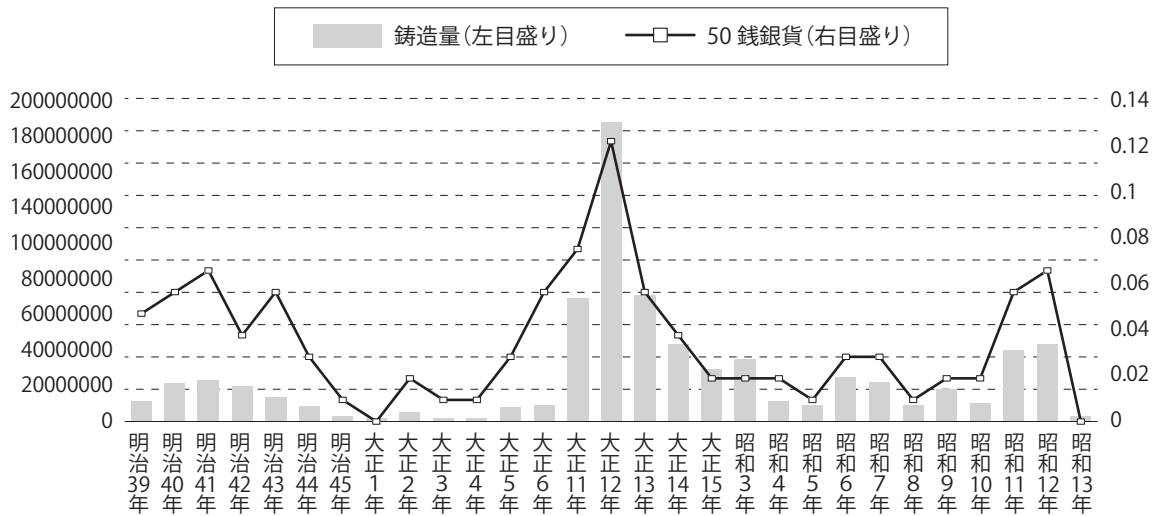


図15 50銭銀貨の比率と発行量の比較

3. 所見

本資料の特徴は、次の2点と言えよう。

- ① 神棚に貨幣を納めるといふ個人の活動を反映した資料であり、当時の貨幣流通状況を示しているものではない。
- ② 一方、一種類(同一額面)の貨幣については、無作為に納められていることから、発行年ごとの比率は当時の貨幣流通状況をよく反映している。

特に上記②の特徴を表すものとして、神棚内の小型社で発見されている量の多い3種類(額面)の貨幣について発行量を調べ、本資料に含まれる発行年の比率を比較した。その結果、発行された量と発見される比率がとてもよく一致することが分かった。これは、手元にあった貨幣を選別せず無作為に神棚に納めた結果、当時流通していた貨幣の比率を非常に正確に反映することになったと考えられる。

17

おわりに

本資料は、個人宅の神棚に20世紀前半の近代貨幣を納めたものである。当時流通していた貨幣がまとまった形で発見された貴重なものあり、調査記録を残すことは当時の生活や貨幣の使用を知る上で重要

なものと言えよう。また資料の性質上、このような資料に対して考古学的な調査が行われた事例は、ほとんどない。その点において、本稿は近代貨幣の資料調査として独自の価値を持つ。

調査分析の結果、賽銭として少額貨幣のみを選択していること、一種類(同一額面)の貨幣に関して選択は行われず、その比率は発行量をよく反映していることが明らかとなった。今後は類似の事例との比較を進めるなどして調査研究を進め、近代の貨幣流通について考古学からアプローチする方法論の確立を目指したい。本稿がその一助となれば幸いである。

図版出典

本稿の図版及び表はすべて筆者が作成した。

謝辞

内田昌宏・恵子の両氏には、快く本資料の調査をお許しいただきました。厚く御礼申し上げます。また両氏のお孫さんの吉田まどかさんには、整理作業でお力添えを賜りました。記して感謝申し上げます。

この研究はJSPS科研費JP20H01351の助成を受けたものです。

註

- 1) 國學院大學兼任講師
- 2) 複数枚あるものは状態の良いものを1枚選び、拓本を採っている。
- 3) 一部米国のコインが含まれる。コインは3枚あり、5セント硬貨1枚(1981年)、1セント硬貨1枚(1981年)、1ダイム硬貨1枚(1979年)であった。しかしこれは神棚に定期的に貯金していた時期よりも後のもので、なおかつ海外貨幣である。聞きとりによれば、内田昌宏氏の父は1981年にハワイへ旅行しているとのことで、記念にたまたま貯金箱へ投入したものである。
また恵比須人形型貯金箱には、現行貨幣の50円白銅貨1枚(昭和44年(1969年))もあった。
これも定期的に貯金していた時期よりかなり後に混入したものと考えられる。これらは20世紀前半の貨幣の実態を調査するという今回の調査目的には合致しないため、調査対象から除外する。
- 4) 本稿で使用している貨幣の名称は、下記のカタログの表記に従っている。
日本貨幣商協組合『日本貨幣カタログ2021』(株)紀伊國屋書店、2020
- 5) 50銭以下の貨幣が発行と通用を停止するのは、昭和28年(1953年)である。
「小額通貨の整理及び支払金の端数計算に関する法律」
https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_housei.nsf/html/houritsu/01619530715060.htm
(2022年9月10日(土)11:30アクセス)
- 6) 当時発行されていた貨幣については、前掲4)のカタログを参照した。
- 7) 小型50銭黄銅貨の発行量は、前掲4)のカタログを参照した。